

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

校内別室では、校内別室の支援員と共に、地域の子ども食堂を運営している方を講師として、学生ボランティアなどの外部と連携した活動を行っている。

校内別室を利用する生徒への支援として、各生徒が持ち寄った課題に対する個別の学習支援やコミュニケーションなどを行っている。

【取組2】(A中学校)

今年度の校内研修でテーマとしている「三人組(トリオ)活動」と連動させ、生徒が主体的に取り組む活動を目指す「きずなづくり」を伸長させている。

生徒意識アンケートの結果を基に少人数コミュニケーション活動についての実態把握と実践内容を各教科で検討し、各教員が所属学年にて月に1回実施している(主に道徳科)。その際に、「振り返りシート」を活用し、生徒の変化を見取る手段としている。

【取組3】(A中学校)

2年国語の授業を通してトリオ活動を実施。研究主題「豊かな人権感覚を育み、自他の大切さを認める生徒の育成」に迫るための具体的な手だてとして、次の取組を行った。



- ① 三人組(トリオ)活動を取り入れ、発言しやすい環境を作ることで、より主体的で多様な意見の交流を行えるようにした。
- ② 個人学習から集団での活動、さらに個人学習を行い、教育支援ツールを活用して振り返らせることで、自他の考えを深めた。

【取組4】(A中学校)

地区における研究指定校の校内研修と関連させて、「居場所づくり」、「きずなづくり」に関して不登校の未然防止に活用できる諸活動について、以下の年間計画を通して、発表に向けて全教員間で共通認識を深化させている。

- 7月: 「三人組(トリオ)活動」の進捗状況確認と情報共有
- 10月: 外部の講師を招いた校内研究授業の実施と検証
- 1月: 研究発表会(1・2年研究授業と研究発表)

多様な学びの場を確保する取組

（「早期支援」及び「長期化への対応」の取組）の推進

支援会議（B中学校）

以下の例のような段階に応じた支援が設定されており、生徒への具体的な支援内容や連携機関などがそれぞれ明記されているため、個々の生徒への対応が全教員に共有できる体制が整っている。

- ・第1次支援の例：ペアやグループ配慮
- ・第2次支援の例：外部機関、SCと連携
- ・第3次支援の例：校内別室など

アウトリーチによる支援（B中学校）

3年生の事例では、2年次に教室に入らず校内別室へ登校をしていたが、3年次に進級する際に登校支援のある日は教室で過ごせるようになった。体育祭や修学旅行をはじめ、文化祭の合唱練習に参加できるようになった。担任・家庭と連携し、自らすすんで登校をできるようにするための支援を継続する。

校内別室における支援（C中学校）

不登校傾向の生徒の保護者と情報交換を行い、家庭での様子と今後の支援内容や方向性についての共有を図っている。

今年度から校内別室が新設された学校で、先進校の取組や活動例を取り入れている。

教室環境については、「学習スペース」と「リラックススペース（床マット・クッションなど）」に区切り、個々の生徒に対応できるよう配慮している。



デジタル機器を活用した支援（D中学校）

校内別室を利用する生徒が教室の授業を受けたい場合、オンラインで受講している。一人1台端末に必要に応じてリアルタイムに配信している。また、全校生徒の欠席連絡やWeb会議機能を活用したオンライン面談を実施している。

【2年生の例】教科：英語・数学
実施日：週3～4回（月・水・木ほか）

関係機関との連携（B中学校）

【3年生の事例】

当該生徒は、1年次より不登校傾向が始まった。現在は校内別室と教室を利用している。家庭環境が不安定な状態ではあるが、保護者との関係は概ね良好である。SC・SSW・児童相談所・医療・子ども家庭支援センター等と連携している。

成果

未然防止の取組については、校内研修と連携し、全校体制で研究授業の実施と検証を行うことで、少人数活動（トリオ活動）についての全教員のスキルアップを図ることができた。

課題

早期支援・長期化への具体的な対応については、組織的で効果的な体制の構築を一層進める必要がある。